

Topic 55

米国カンザス州のドライクリーニング プログラム

- 1) こんなところで
- 2) カンザス州のドライクリーニング プログラム

お疲れ様です。環境メルマの佐藤です。今週は、カンザス州にスポットを当ててブラウンフィールド再開発をみてみます。

1) こんなところで

カンザス州は、米国のちょうど真ん中に位置している横長長方形の州です。同州は1861年1月29日、34番目に米国に加入しました。州の総人口は約275万人、人口密度は約13人/k㎡。州都はトピカ、州最大都市はウィチタです。

地図をみるとわかるとおり、ここには山という山は見あたらず、広大な台地状の平原が広がっています。そんな土地柄、夏暑くて冬が寒い。それに加えて雷雨やトルネードが発生。このような厳しい自然条件の中、西部開拓時代に人は開墾を進めていったのですから、その苦労が並々ならなかったことが容易に想像できます。カンザス州のトルネードといえば、頭に思い浮かぶことがもう1つ。それはベストセラー児童文学作品「オズの魔法使い (The Wizard of Oz)」の物語。カンザス生まれのドロシーが、トルネードにさらわれてしまう場面をご記憶の方も多いのではないでしょうか。物語もさることながら、彼女が（物語の中で）歌うOver The Rainbowは昔も今も、老若男女問わず親しまれている音楽ですね。

同州の主な産業は、グレートプレーンズで展開されている大規模な農業、牧畜。それから、ウィチタをはじめとする都市部では、食品加工、小型飛行機の製造、石油生産などが地元産業として根付いています。

2) カンザス州のドライクリーニングプログラム

ここからは本題のブラウンフィールドです。カンザス州では、州の公衆衛生・環境局が「自主浄化と不動産開発プログラム (VCPRP: Voluntary Cleanup and Property Redevelopment Program)」を運営し、ブラウンフィールドサイトの浄化に取り組んでいます。2003年までの統計を見ると、311サイトが登録、そのうち104サイトが浄化中ということでした。米国中西部の他の州に比べると、同州ではVCP利用頻度が比較的多いようです。

VCPとは別途、カンザス州公衆衛生・環境局はドライクリーニングビジネスに特化した環境対策プログラムを運営しています。カンザスは米国の中でも特に地下水の飲用や農業用水として利用される割合が高いため、ドライクリーニング利用の普及とともに地下水が汚染されると、人の健康と生活環境に悪影響がでます。そこで州政府は1995年にドライクリーナー環境対策法 (DERA: The Drycleaner Environmental Response Act) を公布し、その後、プログラム（実際に役立つ具体的な取り組み方法やルールなど）を立ち上げました。

ではここでプログラムの内容を見てみましょう。

- ・ 州内にある全てのドライクリーニング施設の稼働状況を把握する。（→クリーニング施設は毎年登録申請書を提出・更新することが義務付けられています。）
- ・ ドライクリーニング洗浄溶液（揮発性有機溶剤）により汚染されたサイトに対して浄化対策を講じる。
- ・ 現場の遵法性をチェックするため、不定期に現場視察を実施する。
- ・ 環境コンサルタントにサイトアセスメント及び対策実施依頼などのコーディネーター役をまかせる。
- ・ ドライクリーニングファンドを運用・管理する。

このファンドの財源は、

- ・ 全ドライクリーニングビジネスの総収入に課せられる徴収金
- ・ ドライクリーニングの洗浄溶剤に課せられる徴収金、及び
- ・ 施設ごとの年間登録料

です。利用者は対象に含まれておらず、業界のみんなでちょっとずつお金を出し合って協力しています。ファンド運用においては、どのサイトを優先して融資していくかを決める必要性が出てきます。そこで公衆衛生・環境局は、ドライクリーナー環境対策法に基づきスクリーニングをかけて、サイト浄化緊急度指標が高いサイトから融資しています。具体的にどのような設問を設けて優先順位を決めているのか知りたいところです。

ここでちょっと日本のクリーニング業界の現況をみてみましょう。(ドライクリーニング店のみに限った情報ではありませんが。)

業界規模 (2005年3月31日現在)

施設数: 150,753 施設。そのうち一般クリーニング店 (42,664)、取次店 (108,089)。

経営主体: 個人 (69.4%)、株式会社 (7.1%)、有限会社等 (23.4%)。

経営規模: 年間売り上げベースで 3000 万円未満が 8 割。零細層が中心。

※ 以上、全国クリーニング生活衛生同業組合連合会の報告による。

日本では一般クリーニングが 4 万件以上、その中でドライクリーニング洗浄機を設置している事業者は 30000 件以上あるようです。さて、土壌汚染を抱えている施設はどれくらいあるのでしょうか。日ごろから私たちがお世話になっているクリーニング屋さんの中には、深刻な経済問題を抱えている方々が多いようです。そのような状況ですから、土壌・地下水汚染の浄化対策?。。。そんな余裕ないですよ。と同時に、土壌・地下水の汚染、ブラウンフィールド問題???何のこともやらチンプンカンプンってところが現実ではないかと思います。この点にかんしては日本も米国も同じはず。我が国においても、リスクコミュニケーションについてもっと真剣に検討・開発することが大切になってくるのかもしれない。

今週はカンザス州でおなかがいっぱい。ネブラスカ州への移動は来週にしたいと思います。

Thanks God It's Culture Day!

Thanks God It's Brownfield!!

環境メルマ 佐藤 (t.sato@ers-co.jp)

坂野のつけたし (banno@ers-co.jp)

Nickname - 「The Sunflower State (ひまわりの州)」 「The Wheat State (小麦の州。アメリカのパンかごという俗称も)」 「Midway, U.S.A./The Central State (アメリカのへそ、地図で見るとアメリカの真ん中にあります)」 「The Grasshopper State (1874年イナゴに襲われる)」
事例紹介 -Kansas City (カンザスシティ): カンザス州の東端にあるこの都市は、隣のミズーリ州にまで都市域が広がっています。人口はミズーリ州側のほうが多く (44 万人 vs 15 万人)、一般にはミズーリ州の都市とされているようですが、細かい話は抜きにして、今回のブラウンフィールド事例として紹介をしようと思います。

1998年にカンザスシティは Showcase Community に選ばれています。アセスメントや再開発活動を支える連邦職員にかかる費用にあてる上限 40 万ドルのお金を米国環境保護局 (EPA) から受け、さらに 20 を超える連邦機関からの資金的、技術的サポートを得ることができます。

カンザスシティの中心工業地域 (CID) は、食肉、農業、倉庫、鉄道など産業活動の盛んなところでしたが、町の中心を流れる河川の氾濫や産業構造の転換から、多くの事業者が去り、ブラウンフィールド化してしまいました。しかし、街の中心はもともと交通の便がよく、Showcase Community に選ばれたことがブースターとなって、1990年代から数多くの再開発事業が進められています。

これまでもっとも成功したプロジェクトの一つといわれるのは、8.8万㎡の鉄道操車場をビジネスパークに再開発した事例です。1970年代に土地は放棄され、鉛塗料、地下タンク、アスベスト、さらに砒素による汚染土壌が再開発を阻みます。ブレイクスルーは官民パートナーシップとVCPにありました。住宅都市開発省からの助成金、州のブラウンフィールド融資、州経済開発省の再開発支援策など、これでもか！というくらいの支援の手が差し伸べられます。その結果、375人の雇用が生まれたということです。この再開発は、2003年にフェニックス賞を受けました。
<http://www.kclibrary.org/localhistory/list.cfm?list=coll&CollectionID=147> (CIDのかつての繁栄；カンザスシティー図書館の蔵書)
[http://dnr.missouri.gov/env/hwp/bvcp/docs/Kansas City Terminal Railway.pdf](http://dnr.missouri.gov/env/hwp/bvcp/docs/Kansas%20City%20Terminal%20Railway.pdf) (ビジネスパーク再開発)